

悲鳴の理由はすぐに知れた。

宿を出て間もなく、今朝がた訪れた市場を視界に捉えて、ノランは「くそ、マジかよ！」と、吐き捨てるように言った。

おそらく逃げて行った人たちのものだろう、市場の中にはここにランプが転がっている。そのうち幾つかは火がついたまま、辺りの風景をぼんやりと浮かび上がらせている。

その明かりの中で、騒々しい音と共に、積み上げられていた木箱が吹き飛ばされた。獰猛な唸り声を上げながら、のし、のしとその生物がこちらへ向かって歩いてくる。

邪獣であった。

ネックは戦闘態勢を整える。

隣のノランも全身に魔力を漲らせ、しかしかなり動揺しながら、「おいおい、いつの間にフィルストは邪獣の巣窟そうくつになったんだ……？」

普通のものたいくの体躯より一回り大きな猪の姿をした邪獣の眼光が、まっすぐにネックとノランを射抜く。頭を低くして鼻を鳴らしながら、前足で地面を搔いている。

ぐ、と後ろ足に力がこもって、

「来るぞ!!」

地鳴りのように吠え、邪獣が猛然と突進してきた。

研がれた包丁のような牙が、街灯の明かりに瞬間輝く。ネックとノランは、それぞれ左右に横っ飛びして邪獣をかわす。邪獣は左手に逃げたネックへと顔を向け、再び襲い掛かろうと体を沈める。

次は避けられないと察したネックは、邪獣を迎え撃つべく左手のひらに魔力を集中させる。牙が自分に届くか届かないか——その距離で、邪獣に今撃てる最大の火球を放り込んでやる。相手が怯んだその隙に距離を置く。

どん、と邪獣が地面を蹴った。暗闇の中で、その眼光が流線を引く。

ネックはぎりぎりのタイミングを待って、邪獣の脇腹へ火球を放った。くぐもった音と共に爆炎が上がり、邪獣が悲鳴を上げてよろめく……が、勢いは死んでいない。

慣性のついた邪獣の巨体が迫り、大きく鋭い牙が肩を切り裂こうとして、ネックはこれから来る壮絶な痛みを耐えるべく、歯を食いしばった。

が、その牙がネックを袈裟斬りにする寸前、まるで何かに後ろから引っ張られるようにして、びん！と、邪獣の体が止まった。ネックは一秒もないその間に、ステップを踏んで後ろへ逃げ、状況を把握すべく視線を巡らせた。

ノランが、邪獣の尻尾を抱えていた。

そして、

「うおおおおおらああああああっ!!」

ノランは気合と共に尻尾を掴み、バカ力で邪獣を思い切り引いた。

そのまま背負い投げをするように邪獣を叩きつける。

邪獣は、地が抉れるほどの勢いで頭から地面に激突した。ややあって身を起こしたが、ダメージは明白だった。荒い鼻息とともにぐうぐうと不気味な声を出しながら、今度はノランに襲い掛かろうと殺気を放つ。

むろん、次の攻撃を悠然と待っているノランではなかった。

邪獣がダメージから立ち直るまでの間、ノランは右の拳に魔力を集中させていた。邪獣が立ち上がる一瞬の隙を見て、ノランは魔力の乗った右の拳を地面に叩きつけた。

「うおおおおお！ これで終わりだ！」

すると、邪獣の周囲の地表がいくつも隆起し始め邪獣を空中へ突き上げた。仰向けになった邪獣はそのまま土の槍に突き刺さり、ほどなくして動かなくなった。

邪獣の沈黙を確認し、ノランはぺたん腰を下ろした。

右手に痺れを感じ、肩で息をしながら、ネックに向けて左の親指を立てる。

額の汗を拭いながら、ネックは頷いた。

これで終わったかと思われた。

しかし、ふたりは気づいていなかった。

この一連の戦闘を、倉庫の屋根上……街灯の届かない闇に紛れて見ていた者たちがいた。

「……ねえ、ハーミット」

ほんの数刻前、街の入り口にいた、ふたりの黒ずくめの人間である。

「あの人たち、魔法を使ったね」

黒ずくめのひとりが言い、ハーミットと呼ばれた人間は頷いた。

「ええ、タワー、異血だわ。しかもとっておきのね」

ハーミットは思案する。

「……どうする？」

タワーと呼ばれた人間が訊く。「——諸悪の根源には、滅び去ってもらいましょう」

ハーミットは、背後に目線を送る。

ぬう、と、闇から新たな邪獣が姿を現した。

一体ではなかった。